

# 東アジア5都市調査の 結果からみた全体的傾向

国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官 一見真理子

## はじめに

本調査は、東アジア圏内の主要5都市の幼児の生活について同時に実施された初めてのアンケートであり、興味深いデータが提示されている。

調査前に、われわれが関心をよせた点はさまざまある。東アジアといえば儒教文化が共通の背景にある。この文化圏固有の学業成績（試験結果、学歴、後天的努力による将来の栄達など）を重んじる傾向や長幼の序を重視する傾向が、20世紀の幕開け前後に導入された遊びの価値を重んじる近代幼児教育思想や、90年代に条約として結実した子どもの権利思想などと、どのようにバランスをとりながら存在しているのかを考える際の貴重なデータがそこから得られるだろう。また、今日の急速な少子化や女性の社会進出、経済社会文化のグローバリゼーション・インパクトのもと子育て環境の変化が、東アジア地域の親の意識にどのような影響を与えているのかといった問題もここから鳥瞰的に知ることができることだろう。ここでは以上のことを念頭に、5都市の調査結果が示す全体的な傾向と各都市の幼児の生活と子育ての特徴についてとりあげる。

## 1. 幼児と親のプロフィール

少子化・核家族化が東アジア5都市では進んでいる。一人っ子率は中国の2都市が最も高く、核家族化傾向は東京が最も強い。北京、上海、台北の調査対象の保護者は比較的高学歴で共働きしているのが一般的で、園の送迎などに父親も一定程度かかわっている。東京とソウルは専業主婦の母親が多く、学歴などの背景は多様、かつ幼児の世話は主に母親に任されている。

今回の主な調査対象となったのは、東京、台北の3～6歳児およびソウル、北京、上海の3～6歳児までの幼児を正規の教育・保育機関（以下では双方を合わせて「幼児機関」と呼ぶ）に預けている保護者である（主に30～40代）。アンケート記入をしたのは東京、ソウルはほとんどが母親であるが、中華圏の3都市（北京、上海、台北の3都市をまとめて指す場合には、以下「中華圏3都市」と呼ぶ）では、父親の記入も5～6人に1人と決して少なくない。以上は、東京、ソウルでは幼児のことは母親のほぼ専管事項（「専業主婦」の比率は東京68.0%、ソウル50.8%）であることを示唆し、北京、上海、台北の場合、母親の大多数が就労（「常勤（フルタイム）」十

「パートタイム」＋「フリー（在宅ワークを含む）」の比率、北京86.5%、上海80.8%、台北70.6%）しているため（p.10 表B-1）、父親も園に日常的に顔を出していることと関係があるだろう。

記入対象の子どもは、全体で60～80%が第1子である（p.9 図A-4）。このうち一人っ子率が最も高いのは、80年代に始まる人口抑制政策が緩和されつつもいまなお継続している北京と上海である（p.8 図A-3）。

東アジアの都市部では核家族化が進んでいることが問題点として指摘されるが、横断比較してみると状況には温度差があり、東京では核家族が最多の80%以上を占めているのに対して、中華圏3都市では約半数の家庭が三世代同居をしており、ソウルの場合は東京と中華圏3都市の中間に位置していた（p.11 表C-1）。

親の最終学歴をみると、東京、ソウルの場合は比較的多様であるのに対して中華圏3都市では、大学院卒業の比率が父母とも少なくないなど総じて高学歴傾向である。逆にいうと、高学歴層の親が利用しているのが正規の幼児機関であることがうかがえる（p.11 表B-2～3）。

家庭の収入については、東京、ソウルがほぼ正規分布を描いているのに対して、北京、上海、台北は変則的なM字型分布となっている。とくに上海の場合は、右肩あがりのM字となっていて高収入層が登場していることが注目される（p.183 基礎集計表）。

## 2. 幼児の生活時間

5都市の中で早起きなのは北京の幼児で、早寝早起きなのは東京の幼児であった。ソウルと台北の子どもたちは遅寝遅起き傾向にあった。東京以外の都市では平均睡眠時間（昼寝時間含まず）は10時間を切っている。

子どもの生活時間は、親の生活時間と連動している。都市部の幼児の就寝時刻は深夜にずれ込む傾向があり、各国の専門家は睡眠不足を問題視している。東京、北京、上海はその中で比較的早寝早起きであった（p.51 図1-1-9）。北京、上海の子どもが早起きなのは、親の勤務時間が社会全体で早く設定されているためと考えられ、これに合わせて幼児機関では子どもの朝食が提供されることも多い。ソウル、台北では登園時刻が相対的にゆっくりめであることもあり、夜更かし傾向に拍車がかかっていることが推察される。

子どもの平均在園時間を園の類型別にみると（p.53 図1-1-10）、東京とソウルの幼稚園が相対的に短く（約6時間）、そのあとは、短い順にソウルの保育施設<台北の幼稚園<上海の幼児園<台北の託児所<東京の保育園<北京の幼児園となっている。

他のデータからも明らかになるが、保育サービスと親の生活時間のバランスに比較的無理のない中華圏3都市と、保育サービス時間が不足し働く女性の出生率に影響を与えているソウル、働く親のために保育時間の延長サービスが実施されているものの親子の生活時間に相対的にゆとりがない東京、といったそれぞれの都市のプロフィールが以下のデータと合わせて読み取れてくることだろう。

### 3. 幼児の習い事

5都市の幼児の約6～8割が習い事をしている。その内容は、東京がスポーツ志向であるのに対し、他都市では芸術（絵画・音楽など）と知的学習の双方が盛んである。また、グローバル化の動向を反映し全都市で行われているのは英語である。さらに習い事をする比率は子どもの年齢が上がるほど高くなり、6歳児では約8～9割にまで及んでいる。

各都市で習い事をしている幼児の割合は、約6～8割あり、上海（78.4%）とソウル（72.6%）が高比率であった（p.54 表1-2-1）。また幼児の年齢が上がるほど比率が高くなるが（上海の6歳児が最高で91.0%）、3歳児からの早期教育の数値が高いのもソウルと上海だった。

流行の分野は都市により違いがみられた（p.55 図1-2-1）。東京ではスポーツ関連が盛んで、次いで、英語、音楽と続く。ソウルでは「学習誌」の利用が半数を超え（しかも3歳児から40%以上が利用、図表省略）、次いで絵画、英語の順となっている。北京と台北では、絵画、英語、音楽、計算の順に人気があり、経済的に豊かな上海ではそれに加えてスポーツも盛んで、ジャンルの幅がさらに広がっている。また、各都市とも習い事の内容によっては明らかな性差がみられた（とくに女子の芸術分野、男子のスポーツ分野）（図表省略）。

最後に、児童館など公共施設における親子参加の教室・サークルの利用について5都市の中で調査項目にあげたのは東京だけだった。ただし他都市でも子育て支援サービスがモデルケースとして取り組まはれているので、今後の調査では、社会状況の変化に合わせて、これらの項目も登場する可能性がある。

### 4. 子どものメディア接触

テレビ・ビデオ・DVD（VCD）などの平均視聴時間は、東京が最も長く（3時間43分）、最も短い北京、上海とは2時間、台北、ソウルとも1時間前後の開きがあった。その他のメディア機器の使用は、テレビゲームでは東京、パソコンはソウル、英会話や知能開発などの学習機器については中華圏3都市の数値が相対的に高い。

メディアとの接触については、5都市とも子どもたちの生活の一部となっていることが確認されたが（p.64 図1-3-3）、とくに東京のテレビ・ビデオなどの視聴時間の長さやソウルのIT化が幼児の生活にまで及んでいることが目をひく（p.62 図1-3-1）。一方、北京、上海でテレビ・ビデオなどの視聴時間が短いのは、幼稚園で過ごす時間が長いのに加え、習い事や家庭内での学習などで余暇が親にコントロールされる傾向が強いことを物語っているだろう。

また各都市とも、子どもがテレビ・ビデオ漬けになることに対する専門家からの警告も一定程度浸透しているとみられ、親子で一緒に反応しながら視聴したり、あとで内容について話をしたりする家庭が7～8割であった。しかし一部にテレビ・ビデオ視聴を放任し、会話のない家庭があることも気になるところである（p.172 基礎集計表）。

## 5. 母親の意識（1）：調査結果から浮かぶ各都市の母親像

各都市の母親とも9割前後が共通して子どもは後天的にどんな才能も伸ばせると考え、過半数から7割以上が、3歳までの教育に母親がいつもかかわるか責任を持ったほうが良いと考えていた。

本調査全体から浮かびあがった各都市の母親のあり方を大まかにスケッチするとどうなるだろうか。

**東京の母親**：子育ても自分の生き方も大切にしたいゆるやかな子育て志向（子どもの興味関心を尊重し、大学進学や学校名にこだわらず、幼児期には子どもの知的学習よりも人とのかかわりやからだづくりを含めた基本的生活習慣の重視）がみられる。

**ソウルの母親**：子育てへの責任意識（3歳までは母親が育てるべき、自己犠牲もやむをえない、子どもが言うことをきかないときは厳しくしつけるべき、親には子どもの能力開発を支援する責任があるなど）が強く、同時に子どもの自主性や丈夫な身体づくりも重視している。

**北京・上海の母親**：子育てだけでなく自分の生き方を大切にしたいと考えているが、同様に3歳までの教育の大切さを認識している。また、子どもに対して明確な有名大学・大学院への進学希望を持ち、知的学習面にも芸術面にも力を入れている。

**台北の母親**：子育ての責任を必ずしも母親ひとりで背負い込んでいない。反面、子どもの教育については親が主導権を握ってよいと考え、早期から文字・数字なども重視し、子どもに対して高学歴を期待している（p.70 図2-1-1①～⑦）。

以上の結果は、環境次第で才能が伸びるという東アジア地域に共通する儒教的な信念の存在を裏づけている。また母親の就労の有無とは関係なく、すべての都市で3歳までの教育が大切であることを大多数の母親が地域内で強く意識していることも確認された。しかし、「教育熱心な東アジアの母親たち」と一口にいても、上述のように都市間のトーンの違いがみられ、とくに東京の母親が相対的に高学歴・早期教育志向でない点が興味深い。歴史的には同じ儒教（漢字）文化圏にありながら唯一科挙制度が導入されなかった日本では、もともと他よりぬきでることよりも「ひとなみ」志向が強いという通説を裏づけるものともいえるし、日本では成長神話が崩壊して社会全体の上昇志向が一足先に冷却化しているからとも考えられる。

## 6. 母親の意識（2）：わが子に望む将来の人間像

「自分の家族を大切にする人」になってほしい点は5都市共通であるが、東京と他都市の間に子どもの将来像の期待に顕著な違いがみられた。

わが子に「なってほしい人」の回答ベスト3に各都市で共通して入ったのは、「自分の家族を大切にする人（東京第3位、その他では第1位）」であった（p.73 図2-2-1）。ちなみにこの家族の範囲がどこまでをさすかは質問していないが、想定されるものが異なっていることも予測される（ソウルや中華圏3都市のほうが東京の場合よりも家族の縦と横のひろがりがある可能性）。しかしいずれにしても、個人志向でなく家族という単位を大切にす東アジア文化圏

の特色が一定現れているとみてよいだろう。

東京では、「友人を大切に人（第1位）」「他人に迷惑をかけない人（第2位）」の比率が際立って高く（以上の項目の比率は他都市ではむしろ低い）、他都市で高い比率だった「リーダーシップのある人（ソウル第2位）」「まわりから尊敬される人（北京第3位・上海第2位）」「仕事で能力を発揮する人（北京第2位・上海第3位、台北第2位）」「社会のために尽くす人（台北第3位）」の比率はむしろ低かった。わが子に社会の指導的立場について大いに活躍してほしいという他都市の母親の願いと、東京の母親の願いは対照的である。東京の母親は、控えめに最低限の希望を選択し、他都市の母親は最大限の希望を選択している可能性があるのかもしれない。

なお、ソウルで第3位に入った「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」については他都市の調査票では「のんびりと生きる人」という表現であったので、表現を変えて調査すれば他都市でのポイントも上がったであろうと思われる。いずれにしてもソウルでも、過熱ぎみな競争社会への一定の反省が2000年頃からみられていたが、その影響の確認される数値であった。

## 7. 母親の意識（3）：子育ての喜びとストレス・不安

どの都市でも、育児に喜びを見いだす肯定的感情が7～9割に達しているが、反面、育児ストレスや不安も大なり小なり抱えている。育児ストレスを示す項目のポイントが比較的高かったのは東京とソウルの母親である。

どの都市でも幸いなことに、母親の子育てに関する感情は、肯定的なものが否定的なものを大きく上回っていた（p.78 表2-5-1）。母親たちの持つ不安感情のなかで5都市に共通して現れた項目は、「子どもが将来うまく育っていくかどうか」についての心配、育児の具体的場面で「どうしたらよいか分からないこと」で、都市生活のなかで上の世代の援助や適切なロールモデルを欠いている母親の状況が確認できる。

都市によって目をひくのは、東京で「子どもに八つ当たりしたくなること」「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」など、潜在的な虐待を思わせるような項目の比率が他都市よりかなり高いこと、およびソウルの母親の「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」が突出していることである。いずれも専業主婦の比率が高い都市、女性の就労条件が相対的に整っていない都市であり、このような部分に適切な育児支援とストレスの解消手段が講じられることが望まれる。これに対して中華圏3都市では、母親が職業を持ち子育てと両立できている分、自己肯定感情も比較的高く、子育てにかかわるマイナスの感情へのポイントが概して低くなっている。

## 8. 父親の家事・育児参加の実態と母親の意識

父親の家事・育児参加については、北京、上海、台北が男女共同参画型により近く、東京とソウルでは分業傾向が強い。父親の家事・育児参加に対する母親の満足度と希望については、母親の就労の有無によって意識にずれがある。

集計結果によれば、家事のうち「買い物」には台北の父親が、「食事のしたく・後片付け」には北京の父親が、「掃除」はソウルの父親が、「ごみ出し」はソウルと北京の父親が比較的良好に参加している（p.177 基礎集計表）。東京の父親の家事参加はすべて最低で、平日はほぼ何もできない状況である。そのようななかで、東京の父親が唯一日常的に協力しているのが「ごみ出し」である。

父親の育児参加は、各都市とも家事参加より進んでおり（p.91 図3-2-2）、とくに「子どもを叱ったり、ほめたりする」は全体的によく行われている。父親の帰宅時刻が早く、比較的育児参加に時間的ゆとりがみられるのは、台北と北京で、両都市よりも経済活動に追われている上海はこれに次ぐ。父親の帰宅時刻の遅さとかかわって、東京とソウルの父親は育児参加時間を十分にとることができない。そのようななかで東京の父親が本領発揮しているのは「子どもをお風呂に入れる」である（これは湯船に親子でつかるといふ日本的な入浴習慣も影響していると考えられる）。また、わが子が病気のととき、中華圏3都市では8割の父親がよく面倒を見ているが、東京とソウルの父親は母親任せの傾向が強かった。

以上に対する母親の意識をみると（p.94 図3-3-1～2）、家事参加について母親が満足している順（「とても満足している」＋「まあ満足している」）に台北・北京・ソウル＞上海＞東京となる（東京は、「ぜんぜん満足していない」母親が最多）。ところが実際にもっと家事参加を希望するかどうかになると、家事参加率の低い東京ではこれを望む比率が台北、北京、上海よりもずっと低くなっていて、最初から夫に強く希望していないことがわかる。

育児参加については（p.94 図3-3-3～4）、台北＞ソウル＞東京・上海・北京の順に満足している。父親の育児参加の度合いが実際には高い北京・上海の母親が満足していないのは、就労と家事に加えて子どもの習い事に奔走しなければならない母親の時間的拘束の強さのためであることが予測される。またソウルの父親の育児参加は近年の女性の社会参加促進政策のもとでの啓蒙の結果改善がみられたことが推察され、母親がこのような変化に実際に満足していることがうかがわれる。父親への育児参加への希望については、中華圏3都市の母親がさらに強く希望しているのに対して、ソウルと東京の母親は現状に比較的満足していることが明らかとなっている。

## 9. 子育て支援のあり方、利用の仕方

子育て支援は5都市とも家族と親戚に最も依存している。公的補助による子育て支援サービスの利用は、目下のところほぼ東京に限られている。

「仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）」が存在するの

は中華圏3都市では80%以上、東京とソウルがこれに次いでいる（p.98 図4-1-1）。なお、台北と東京の約20%、ソウルの30%の母親が面倒を見てくれる人が「いない（ない）」と回答している点が気になる点である。

面倒を見てくれる人は、「祖父母や親戚」が5都市のいずれにおいても7～8割の高い割合である（p.101 図4-1-3）。その次に頼れるのが「父親」で、なかでも東京の半数以上、台北の3人に1人の母親が父親に外出中子どもを預けている。なお、上海では多忙な父親をあてにするよりも農村部から雇用するベビーシッターの利用率が高い。ちなみに中国本土の大都市部では農村部に住んでいる女性を住み込みで雇用することが多く、台湾でも東南アジア系女性の雇用が比較的容易である。これに比べて人件費の高い東京・ソウルの若い親は、ベビーシッターを気軽に利用できる状況ではなく、近隣家庭との預かり合いなどの相互扶助が行われている。

自治体・民間企業による子育て支援サービスの利用については、東京では7.9%の利用があるが、他都市ではほとんど利用がない（ソウルでは行われていない）。

## 10. 現在通っている園への要望

幼児機関に対して、東京とソウルの母親は子どもの社会性発達の機会と子育て支援を期待し、北京、上海、台北の母親は、社会性も知的学習も自由遊びも子育て支援もすべて非常に強く期待する傾向がみられた。また「家族が病気の時に、預かってほしい」では、東京と台北で比較的高く（ともに過半数）、「子どもが病気の時に、預かってほしい」は全体として20%前後にとどまっている。

以上について各都市の状況をもう少し詳しくみると（p.103 図4-2-1）、東京の母親は、「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」「子育て相談ができる場所になってほしい」といった社会生活や子育て支援にかかわる項目を強く希望し、保育内容に知的学習やおけいこ事を含めることについての要望は相対的に低い。ソウルも東京とほぼ同傾向で、とくに子育て相談機能を園に期待する声が東京よりも強い。これに対して中華圏3都市では、園に対する要望が全面的で非常に強く、社会生活・コミュニケーション関連、知的学習、才能開発、自由遊び、子育て支援も希望している（80%以上）。

これらの背景には、正規の幼児機関のあるべき教育方針（生活習慣を身につけ、遊びを中心とした活動により各分野の発達を促す任務）が、東京、ソウルでは基本的に母親の側に伝わっていて、それを理解したうえでの要望となっていることがまず考えられる。園で期待できない場合には、放課後を使って習い事をさせることもあるだろう。また、中華圏3都市については、幼児教育の民営化路線のなかで、園側が母親のニーズをよく聞く方向になっており、母親は注文を何でも積極的に出す傾向のあることが考えられる。そしてそのことにより、在園時間中に別料金をとって習い事をさせる園が、今日では多くなっている。

幼児機関内が遊び中心の保育原理にのっとった教育を維持できるか、多項目にわたる才能開発や知育中心に傾くかは、公費による財政支援がどの程度保障されているかにも関係すると考えられる。たとえば韓国では、2000年前後の早期教育の過熱現象のあと、幼児教育への公的支援を求

---

める運動が展開し、成果を収めたことは記憶に新しい。

## まとめ

以上の横断比較からみえてくるものは、果たして何か、今後さらなる検討が必要であろう。母親の置かれている状況からみれば、総じて、東京とソウルの間に、また北京と上海および台北の状況に親近性がみられた。また、5都市の中で先に戦後の経済発展を経験し、その後の沈滞のなかにある東京と、成長の只中にある他都市との間で、母親の子どもへの期待のあり方に大きな違いがみられた。また、この違いが経済成長の推移に連動したものなのか、日本と他国との文化的背景によるものなのかの検討は、残されたテーマといえるだろう。

各都市（各国）では、幼児教育・保育の制度がいま大きく転換しようとしている。その状況は各国のレポートにも論じられているが、このような基本的な幼児の状況およびそれをとりまく環境についての調査資料が、各国におけるよりよい改革のための一助となることを望みたいと思う。